

< 講演録 >

京都大学基礎物理学研究所 研究会
京都大学未来創成学国際研究ユニット設置記念シンポジウム

日時 2015年8月6日(木) 18:00-18:18

場所 コープイン京都 202

司会 村瀬智子(日本赤十字豊田看護大学 教授)

話し手 山極壽一(京都大学 総長)

佐々木 節(京都大学基礎物理学研究所 所長)

西村和雄(京都大学経済研究所 特任教授)

長谷川和子(株式会社京都クオリア研究所 取締役)

山極壽一総長 ごあいさつ

村瀬智子●ただいまより、京都大学未来創成学国際研究ユニット(International Research Unit of Advanced Future Studies, Kyoto University)設置記念シンポジウムを開催いたします。私は本日の司会を担当させていただきます、日本赤十字豊田看護大学の村瀬智子でございます。どうぞよろしく願いいたします。



まず、記念シンポジウムの開催にあたりまして、ご来賓のみなさまにご挨拶を賜りたいと存じます。はじめに京都大学総長の山極壽一様をお願いいたします。

山極●みなさん、こんばんは。村瀬雅俊さん、私はずっと前から未来創成学の出発を聞いて、楽しみにしていたところです。



異分野の最先端の方々が集まって、新しい科学を創造する。これは私たち京都大学が昔からずっとやってきたことではありますが、まだまだ人間には、あるいは世界には、わからない現象がたくさんあります。たとえば、私の専門の分野だと人類の進化が対象ですが、なぜ人間は二足で立って歩き始めたのか。これも、いうならば「創発」という現象ですね。人間に近い霊長類のなかで、二足で立って歩くサルや

類人猿はひとつもない。なぜ、二足で立ったのか。

人間だけが言語をしゃべりますが、ことばというのはいつ、どうやって創発したのかわからないのです。これはいま、マージということばが使われていて、違うルートをたどって発達してきたものが、どこかであわさって、別のものが創発したといわれています。しかし、それはなんなのかというのが具体的にはわかっていません。

現代には、みなさんの分野でもわからない現象がたくさんある。しかも、わからないことをわからないままに研究しているのではなく、ほかの分野の知恵を借りてその現象に迫るといことが求められている時代だと思います。そのために技術も発達したし、我々はいろいろな事例を持つようにもなりました。とくに、ビッグデータを解析する技術は非常に盛んです。そのなかで、われわれは新たにまた問題を見つけていかななくてはならない時代になっていると思います。

まさに、未来創成学には、われわれの未来がかかっているといっても過言ではない。私が期待しているのは、未来創成学を国際的に展開することによって、新たな文明論を創造できるのではないかとということなのです。京都というのは、そのためのふさわしい場所だと思います。

この数年、先日亡くなられた堀場雅夫さんを中心に「クオリア AGORA」という研究会をやってきました。クオリア AGORA の精神も、「常識を疑って新しいことを考える。おもしろいことを考える」ということをひとつのキャッチフレーズにしてやってきました。講演と同時にワールドカフェをして、そこでいろいろな分野の人たちが集って、いろいろな議論を戦いあわせる。そこから新しいアイデアを導き出そうという意図で取り組んできました。

私もその中でずいぶん揉まれ、「ああ、これがこれからの科学だよな」とずっと思ってきたのです。村瀬さんもその一員ですし、今回は村瀬さんが中心になってすばらしい集まりを企画してくれた。そして、将来につなげてくれたということは、とてもありがたいことだと思うし、すごく期待しています。これからはなにが始まるか、たいへん楽しみにしています。どうぞよろしくお願いします。

村瀬智子●山極さま、ありがとうございました。

佐々木 節所長 ごあいさつ

村瀬智子●続きまして、京都大学未来創成学国際研究ユニット長である、基礎物理学研究所長の佐々木節様。お願いいたします。

佐々木●こんばんは、佐々木です。実は、私は未来創成学というものに今まであまり絡ん



ではなかったのですが、ここ半年くらいのあいだに村瀬さんから何回も話を聞いて、完璧に洗脳されました。それでいまここにいるということです。

彼のおかげで、こういう話を立ちあげました。もともと学内の研究所・センター群のなかで「横のつながりをもつ

とたくさん持とう」という話から始まったところに、村瀬さんの話をかぶせて、うまく話が進んだのです。十二の部局のうちの七つ、過半数の研究所・センターが絡んでいます。それぞれの研究所はぜんぜん違います。たとえば、数理解析研究所というのは、純粋数学を研究しているところです。それから、われわれの基礎物理学研究所、経済研究所、こころの未来研究センター、生態学研究センター、原子炉実験所など、その他いろいろ、さまざまところが集まっています。

これだけ幅広いと、言語がそれぞれ違うので、まずは互いのことばをわかりあえるようにすることから始めようと思っています。山極総長のおかげで時間とお金をいただきましたので、これから4年半、それらを大いに活用して、最初の2、3年でまず互いがわかりあう。わかりあったところから、新しいものが出てくるだろうと思います。

未踏科学ユニットという組織のなかの一つとしての未来創成学ですが、両方とも、未来創成だとか未踏だとか、わけのわからないところに足を踏み入れるぞ、探検するぞというものです。未踏科学ユニット全体をまとめている研究連携基盤という組織がありますが、大志万直人基盤長が自分の責任でということによっておられたのは、「一つ二つ、それなりに成果のあるものがあれば、あとはぜんぶ失敗してもよろしい」、失敗しても責任をもちますとおっしゃっています。

そのくらいのつもりで、新しいことに踏みこんでゆく。先ほど山極総長もおっしゃいましたが、これがもともと京都大学の伝統でもありますので、大いに勇気をもって踏みこんでいきたいと思っています。みなさんにぜひご協力いただいて、単に京都大学の中だけではなく、ここにいらっしゃるさまざまな組織・分野の方々も含めて、なにか新しいものを、それこそ京都などとはつまらないことをいわずに、日本あるいは世界のなかで、なにか新しいパラダイムをつくっていただけると願っております。よろしくお願いたします。

村瀬智子●佐々木さま、ありがとうございました。

西村和雄教授 ごあいさつ

村瀬智子●続きまして、京都大学経済研究所特任教授の西村和雄様。お願いたします。

西村●私の専門は、非線形経済動学、複雑系経済学などの経済学です。サンタフェ研究所のエクスターナル・プロフェッサー（External Professor）もしています。



実は、経済学の研究以外にも、前から興味があることがありまして、村瀬先生とはよく話していたけれども、人前ではあまりしなかった話について、少しお話しします。

私は子どものころからずっと不思議に思い続けていることがいくつかあるのですが、その一つが、私の友人で交通事故に遭った人がいて、その人の車が、反対側からきた自動車と後ろからきた自動車に挟まれて、体がポーンと飛んで高速道路に投げ出されて、「まず、絶対に助からない」という状況の中で、かすり傷も負わないで助かったことがあったのです。車から放り出されて空中を飛んでいるときに、時間が非常にゆっくりと流れたのです。時間がゆっくり流れている間に、恐らくいろいろな判断と対応をして、かすり傷も負わなかったのだらうと思います。

これは非常に不思議で、ものすごく集中しているときに不思議なことがあったりすることは何度もあったのですが、それとは違う、深い経験が私も一度あります。皆さんも恐らくあると思います。「どうしてそうなのか」はいまだにわからない。そこまでいかなくても、不思議なことはいろいろあり、そういうことにずっと関心があり、いまでも考え続けて、脳の計測などにもずっと取り組んできました。もちろん、それと経済学の関係が、ないわけではないのですが。

そういうことを話せる機会が得られた、この未踏科学ユニットは素晴らしいところだと思います。

村瀬智子●西村様、ありがとうございました。

長谷川和子様 ごあいさつ

村瀬智子●続きまして、株式会社京都クオリア研究所取締役の長谷川和子様、お願いいたします。

長谷川●さきほど山極総長に、京都大学楽友会館で毎月1回開催しているクオリア AGORA のお話をさせていただきました。総長は「ほんとうにおもしろいな」と言って参加してくださいました。このあいだ亡くなられた株式会社堀場製作所の創業者の堀場雅夫さんも、いろいろな研究ジャンルの方々が集まって談論風発の議論ができるのは、「や



はり京都ならではだな」というお話をしておられました。

いま、ほんとうにいろいろな問題を抱えているのですが、ある特定のジャンルの研究成果だけでは解決できない。いろいろなジャンルの研究を複合的に、皆さま方の智恵を集めないと解決にはつながらない。実は、クオリア AGORA を通じて知りあった村瀬さんからそのお話を熱っぽく語っていただきました。今日、こういうかたちでスタートできるというのはとても嬉しいかぎりです。

大学と京都市民とをどうつなぐかということなのですが、京都大学は東京のほうを向いていなくて、京都からすぐに海外に向けて、いろいろな情報を発信してこられたのではないかと、私は思っています。京都の企業もそうできて、東京なんかはまったく相手にせずに、まずアメリカに行くというような時代だったと思います。グローバル化の時代のなかで、京都のポジショニングというのをもういちど私たち自身が共有化したいと考えるとともに、その役割はとても重いと思っています。

京都の料理人が力をあわせて、和食をユネスコ無形文化遺産に登録してもらいました。和食を無形文化遺産にすることを通じて料理人が気づいたことは、いったいなんなのだろうと。いま、「うま味」ということばが世界を席卷しております。実はフランス料理と交流することによって、「和食の価値というのは、うま味にある」ということがわかったということです。そこではじめて、うま味の研究をしている方はいらっしゃらないだろうかということで、京都大学農学部の伏木亨先生にたどりついたということなのです。民間のいろいろな智恵、そして海外のいろいろな方との交流のなかで、うま味が和食のいちばんの特徴なのではないかということがわかったということは、たぶん異分野の方々との交流の中で初めてわかることではないかと思います。

ぜひ、大学の中だけではなく、京都人のいろいろな暗黙知というのでしょうか、そういう智恵もたくさん吸収していただいて、いま抱えているさまざまな課題の解決につながるように、この未来創成学が力強く発信できることを心からお祈りし、とても期待しています。おめでとうございます。

村瀬智子●長谷川様、ありがとうございました。ご来賓のみなさま、まことにありがとうございました。